

自己存在感を高め、自立する力を育む学級経営

草加市立八幡小学校 宮崎 知彦

はじめに

私は中学校を19年間、小学校は11年間教諭として勤務し、その30年間のうち27年間学級担任を任されました。初めて教壇に立ったとき、社会科の授業をしっかりと研修を積みながら、社会科の楽しさを教えようと思っていました。ところが、教科指導が大切なことは変わりませんが、それと同じくらい重要な仕事が学級経営であることに気づきました。学級での子どもたちの生活が彼らの成長に重大な影響を与えることが分かってきたのです。子どもたちが社会に出たときに必要な資質は様々なものがありますが、その中でも「自立する力」を育まなければならないと思います。その前提が自己存在感を一人一人の子どもたちに感じさせることです。そのために学級経営をどうするかが課題となります。これについて以下述べてさせていただきます。

1 ふれあいのある人間関係をつくる学級経営

教師と児童生徒、児童生徒同士の人間関係がふれあいのあるものでなければ、学習意欲も高まらず、自己存在感を感じることもなくなります。ふれあいのある人間関係をつくるための実践を紹介します。

人間には8つの願望があるとある本にありました。(出典は分かりません)

①受け入れられたい②認められたい③正しく評価されたい④賞賛・尊敬されたい ⑤わかってもらいたい⑥信頼されたい⑦役に立ちたい⑧人を楽しませたい

これを学級経営の視点で考えると、だれもが自己存在感を感じ取れる学級にすることが求められます。つまり、教師や友達との関係を良好にすることが大切であるということです。そこで、ふれあいのある人間関係をつくる手だてが必要となります。

(1) 学級の友達のよいところを手紙に書き、本人に渡す。

子どもは、友達が自分のことをどのように思っているか知りたがっています。それを積極的に知らせましようという企画です。一人の友達のよさを手紙(カード)に書き(担任も書く)、それを全員分集め、本人に渡します。これを毎日一人ずつ実施します。ルールはその友達の良いところだけ書くことです。帰りの会で手紙の大きさはA4の4分の1のため5分くらいで終わります。集めた手紙を2~3人分担任が読みます。この手紙を子どもたちは宝物のようにもらいます。自分の存在が確認できる瞬間です。しかも、自分で気づかなかった自分のよさを発見できるのです。

小学3年から中学3年まで実施しましたが、どの学年にも子どもに好評で、ふれあいのある人間関係をつくる有効な手だてとなりました。また、これを学級通信に載せ、家庭にも我が子やクラスメートの良さを知らせる機会にもできました。

(2) 諸行事や取り組みで協力して成し遂げる機会を多くする。

体育祭(運動会)、文化祭、3年生を送る会等では計画的に組織的に運営しないと成功しません。子どもから見れば、協力して作り上げていく必要が出ます。失敗も体験させな

がら、みんなで成し遂げる経験は子どもたちの一体感を感じさせるよい機会となります。中でも合唱コンクールは互いの人間関係を一気に温かいものにする取り組みです。合唱は、他の行事とは違い、作業を分担してそれぞれが取り組むのではなく、一つの曲を全員が一人ももれなく真剣にやる必要があります。これが成功し（できれば賞がとれれば）学級はまとまりのある、互いに何でも言える雰囲気のクラスに生まれ変わります。私が最も重視した行事です。担任が一生懸命にならなくてはなりません。三つのパートを全部覚え、子どもたちに教えました。すると、子どもたちも真剣に取り組むようになります。

（3）人間的なふれあいの場を多く持つ

- ・昼休みと生徒と一緒に外で遊ぶ
- ・ゲームを取り入れる（イスとりゲームなどの簡単なゲーム、腕相撲大会・バスケットボールやドッジボール大会などレク係による計画的なもの）

（4）意見交換の場を多く持つ

- ・生活ノート（毎日、帰りの会で書く日記を担当が読んでコメントを書く）
- ・班ノート（テーマを決め、班で1日1人が自分で考えたことを記入し、担任がコメントを入れる）
- ・班長会
- ・2者面談・グループ面談
- ・学級運営委員会

（5）座席決めを工夫する（視力の弱い子どもは前の席は大原則）

- ・可能であればクジで決める。（人間関係が良好でないときはできない）くじは自分が引いたものであるから、だれからも文句は出ない。となりがだれとなっても（班のメンバーがだれでも）仲良く協力して生活することを意図したものである。
- ・リーダーを中核に班を考え座席を決める。班での活動を重視すればこの方法となる。そのため、決めるのは担任である。（希望をとりながら）

（6）係や当番は、希望通りに選べなかった子どもに次回は優先的に選ばせる

- ・不公平は子どもたちにとって重大問題。公平に学級を運営することは大切。

2 学級経営の土台である学級のルール確立（生活習慣の徹底）

学級経営を成功させる土台となるものは、ルールの確立です。学校は集団で生活するためルールが必要です。そのルールの最も基本的なもの（挨拶など）は家庭で身につけてほしいのですが、残念ながらそうはなっていません。また、学校にのみ必要なルールもあります。そこで、私は、ルールを一覧表にしてそれを徹底的にしつけることとしました。

（別紙） ここで、会津藩で子どもを対象にした掟を紹介します。

会津藩の「什の掟」 ①年長者の言うことに背いてはなりません ②年長者にはお辞儀 をしなければなりません ③うそを言ってはなりません ④卑怯な振る舞いをしては なりません せぬ ⑤弱い者をいじめてはなりません ⑥戸外で物を食べてはなりません ⑦戸外 で

婦人と言葉を交わしてはなりません ⑧ならぬものならぬものです

江戸時代のルールも⑥⑦以外は今でも通用します。つまり、日本人が、長い年月で培ってきたルール・躰とは不変であると思います。⑧は理屈ではなく、だめなものはだめと言う必要があるということです。ルールを徹底するために、だめなものはだめという方針でしつけました。

ルールが確立し、子ども同士の付き合い方を身につけると、子どもたちは、安心して学級の生活を楽しみ、逆に自由な雰囲気が出てきます。ルールでがんじがらめになるイメージがありますが、これが習慣になってしまうと子どもたちは生き生きとなんでも積極的に活動するようになります。これは大人でも同じで、礼儀や作法ができていれば人間関係が良好になり仕事にもよい影響を与えていきます。また、子どもたちは友達同士何でも言える人間関係ができていきます。後に触れますが、道徳の時間の成功にはこれが条件となります。具体的にルールをいくつか見ていきましょう。

「やる気のない言葉は言わない」

一人の子どものやる気のない発言は、学級全体に波及していきます。例えば、問題を出したときに、だれかが「やりたくない」と言うと、学級全体にやりたくないという気持ちが広がってしまいます。私は、禁句にして逆に「よし、がんばろう」と思わなくても言いなさいと言いました。すると積極的に課題に取り組む子どもが増えてきました。

「悪口や乱暴な言葉は言わない」

けんかの原因は様々ですが、どげよ、うるせえ等の言葉遣いがきっかけになることが多い。いじめの原因となる言葉は、「死ね、消えろ、うざい、きもい」などです。これらの言葉自体を使わせないようにすると、おもしろいようにけんかがなくなります。

「授業が終わって 10 秒以内に次の授業の用意をする」

前の授業の道具をしまい、次の授業の道具を出すという作業を 10 秒以内にするためには、机の中を前もって整理していなくては不可能です。整理整頓をする習慣をつけるためです。また、次の授業の準備ができているので、授業のスタートがスムーズにできます。

3 豊かな心を育む道徳教育

今まで紹介してきた学級経営だけでは自立する力が足りません。子どもたちには豊かな心を育む手だてが不可欠です。それが道徳教育です。

では、まず、道徳教育の目的は何かを確認します。

小学校学習指導要領（中学校もほぼ同じです）

「道徳教育の目標は、学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする。」

「道徳の時間においては、・・・計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育成するものとする。」

わかりやすく言えば、道徳教育は、一人一人の子どもたちが人間としてよりよく生きる力を身につけ、心豊かに生きていくことが目的です。では、具体的にどのように生きていけばよいかを示したものが「道徳教育の内容」です。

中学校においては、24項目あります。つまり、人間として生きていくために必要な価値は24個あるということです。例えば、礼儀・誠実・友情・広い心・畏敬の念・公正公平・奉仕の心などです。これを学校教育全体で養いますが、それを週1回の道徳の時間で補充、深化、統合を行います。

道徳の時間での授業を行うときに、大切なことが学級づくり（学級経営）です。ここでも学級経営が大切です。学級経営については、前に述べましたので詳述しませんが、道徳の時間の視点で考えるならば、次の三つのことに留意して学級づくりをしてきました。

- ①子どもたちが自分の思いや考えを素直に発表でき、何を言っても友達が笑わないので安心して発言できる学級にする。
- ②教師と子ども、子ども同士の信頼関係を深め、互いに友達のよさに気づき、認め、励まし合える学級にする。
- ③思いやりの心を大切にする学級をつくる。友達や動植物にやさしく接し、だれに対しても思いやりの心を育てる。

具体的にどのように道徳の時間をどう充実させるか、実践を紹介します。

- (1) 道徳の時間が、人間にとって生きていくために必要なことを学ぶ大切な時間であることを、最初の道徳の時間にしっかりとらえさせる。（オリエンテーション）
- (2) 話し合いの柱を子どもたちにつくらせる。自分たちの話題として、一人一人が問題意識を持たせるためである。
- (3) 主人公に感情移入しやすいように絵、紙芝居、プレゼン等を活用する。副読本の挿絵のコピーに色を塗るだけでも違う。
- (4) 主人公の気持ちになりきらせるために、子どもたちの興味・関心を持って授業に参加できるように役割演技をさせる。（簡単な劇）
- (5) 話し合いが、教師と子ども1対1にならないよう、一人の子どもの考えを他の子どもたちに広めていく工夫をする。

以上の5点を成功させるために資料分析というものが必要となってきます。

- ①資料のあらすじを把握する
- ②ねらいとする価値は何かとらえる
- ③条件・状況を把握する（話題に入る前の主人公の置かれた条件や状況）
- ④場面を把握し、主人公の心の動きをとらえる
 - ・主人公の人間的弱さ
 - ・主人公が変わるきっかけ（迷っている場面）
 - ・主人公が望ましい生き方に気づく
 - ・望ましい生き方をしようと決意する
- ⑤話し合いの中心場面はどこか

⑥どのような発問するかを考える

これをもとに1時間の道徳の時間の展開は私の場合は、次のようにします。

導入 子どもたちの問題意識を高め、深め、よりよく成長していこうという気

持ちを起こさせる。

導入の仕方には次のようなものがある。

ア、資料そのものから入る（資料のイメージ作り）

イ、人物・時代背景から入る（時代背景が難しい場合）

ウ、ねらいとする価値から入る（教師の願いをいきなり伝える）

エ、児童の生活実態から入る（友達の考え方を知る）

展開前段（話し合いを通して、一人一人の考え方・感じ方を明らかにしていく。）

（1）資料提示（資料渡し）

読み物資料の場合、教師がただ読むのではなく、ドラマの再現を子どもたちに感じさせるような工夫がほしい。

（例）キーワードをくりかえす 子どもの表情を見る 教師の表情・しぐさ

読むスピードを変える（抑揚、強弱、間をとる） 難しい言葉にはコメント

写真 BGM

（2）柱立て（話題づくり）

子どもと共に作る方が望ましい。自分たちが作った話題の方が意欲的な話し合いになる

資料が長い場合などは教師が提示してもよい。

基本発問は3つ。

（3）話し合い

中心発問を通して、ねらいとする価値の追求、把握をする。

中心発問は1～2つ

補助発問は基本発問を補うための発問。

あらすじの話し合いにならないこと。

展開後段（ねらいとする価値の主体的な自覚を図る）

子どもたちが、自分自身の内面に目を向けながら（今までの自分はどうであったか考え）、自分の意見を言ったり、友達の考えを聞いて自分と友だちの考えを比較して考えたりする。

- ・ここは自分と同じだな。つらい気持ちはよくわかる。
- ・このときはどっちを選んだらいいのだろう。苦しいなあ。
- ・でも人間としてこうしなければならないな。
- ・やっぱりやってよかった。
- ・どうしてこんなになってしまったんだろう
- ・これからもやっていこう。
- ・これからはやっていきたい。

終末 (ねらいとする価値についての整理・まとめをする)

学習を振り返り、実践しようとする意欲の高まりを認め、励ますこと。

方法として

- ・教師のまとめ
 - ・教師の説話 (教師の感じたこと、感動等をそのまま話しても効果的)
 - ・体験談 (うその体験談は子どもは見抜く)
 - ・ことわざ、格言 ・作文、日記、班日誌 ・道徳ノート、心のノート
- 決意表明はさせない。(実践化を図る段階ではない)

最後に (自分が考える理想の教師像)

学級経営があつて初めて、教科指導もあり、道徳教育もあり、生徒指導もあると考えます。学生の皆さんが担任を任されたとき、今日の発表が少しでも役に立てただけであればうれしく思います。最後に、30年間担任を任されて、今私が考える教師像を挙げてまとめとします。

○ユーモアがあり、明るく笑顔が絶えない教師

朝、暗く能面みたいな顔で教室に入ってくる担任をみて、子どもたちは1日頑張ろうと思うのでしょうか。子どもたちは笑いのある明るい学級を望んでいます。

○子どもは不公平を敏感にかぎ分ける天才であると知っている教師

教師が信頼を失う最も大きな要素が不公平です。教師も人間ですから好き嫌いがありますが、全員を好きになる努力をしなくてはなりません。おとなしい子は教師の方から話しかけましょう。担任と話したいというのはおとなしい子も同じです。

○ひとことが子どもに大きな影響を与えることを知っている教師

ひとことで子どもを傷つけ、ひとことで勇気を貰う子もいます。

○だめなことはだめと言える教師

子どもの要求どおりに動く教師は逆に信頼を失います。はっきり言える教師を子どもたちは望んでいます。

○常に子どもをどうほめるか考えている教師

ほめられて子どもは育ちます。中学生は、根拠のあることでほめられたいと思っています。だから、日常の教師の注意深い観察が必要なのです。